

主 題：主とともに生きる

聖書箇所：テサロニケ人への手紙第一 5章10-11節

主イエス・キリストの恵みによって救われたあなたは決して救いを失うことはない、神の恵みによって救われたあなたは、絶対に、永遠に救いを失わないと、そのことをパウロは私たちにローマ書を通して教え続けてくれています。私たちは何度も繰り返して学び続けて来ました。私たち信仰者は、神からすばらしい祝福をいただいた者です。「救い」というすばらしい恵みを一方的に与えられた者です。そのことを踏まえて、もう一度、あなたに考えていただきたいことがあります。あなたは神の恵みによってこの救いに与った、それは、あなたが何か特別のことはしたからではありません。特別な人間だからでもありません。神が一方的にあなたをあわれみあなたをこの救いへと導いてくださったのです。その恵みを覚える者として考えていただきたいことは、あなたを救ってくださった神は、あなたに何を望んでおられるのかということです。あなたを救ってくださった神は、あなたに何を期待しておられるのかです。考えて見る必要があります。神は私たちを罪から救ってくださった、永遠のいのちを与えてくださった、それですべてが終わりでしょうか？神は私たちに何も期待しておられないのでしょうか？期待しておられることがあります。あなたに望んでおられることがあります。そのことを私たちは今日、ローマ書を離れてテサロニケ人への手紙第一から見て行きます。

☆救われた私たちに神が望んでおられること**A. 主イエスの身代わりの死の目的 10節**

まず、5章の10節と11節を見ていただくと、10節でパウロは、イエス・キリストがあなたの身代わりとなって十字架で死んでくださった、その身代わりの死の目的について教えています。10節「**主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。**」、ここで言われている「私たちが」とは、全人類のことではなく私たちキリストを信じる者のことです。なぜ、イエスがあなたのために死なれたのか？それは「目ざめていても、眠っていても、」、つまり、生きていようと死んでいようと、あなたが「主とともに生きるため」だと言うのです。主とともに生きるために、主はあなたの身代わりとなって死んでくださったのです。4章の17節を見ると、これと非常に関連したことをパウロ自身が語っています。「次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らと**いっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。**」、「いつまでも主とともにいる」と言うのです。私たちが分かっていることは、この肉体はいつか死を迎える時がやって来ると言うことです。その後どうなっていくのか、聖書は私たちに教えてくれています。

私たちがこの地上での生活を終えたなら、私たちに神が約束してくださったすばらしい天がありまう。「心配することはない」とイエスご自身がヨハネの福音書14章で教えてくださっています。すばらしい住まいを設けてくださるのです。あなたの国籍は天国にあるのです。主とともにそこで永遠を過ごすのです。その約束を私たちはいただいています。ですから、私たちクリスチャンはそのときを待望しながら今日を生活しているのです。私たちは天国に国籍を持つ者として生活しているのです。でも、皆さん、この10節でパウロは「目ざめていても、眠っていても、」と言っています。「眠っていても」とは確かに死んだことです。でも、それだけではありません。「目ざめていても、」とは、つまり、私たちが生活している今このときです。私たち信仰者としての今のこの歩みにおいて、私たちはいつも主とともに生活していると、そのように言えるのです。

イエスがあなたのために十字架で身代わりとなって死んでくださったのは、あなたに天国を約束するためではないのです。今この地上においても、主があなたとともに生きてくださるためです。だから、ダビデは詩篇23篇でこのように言っています。23：4「**たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。**」、「あなた」とはだれですか？神です。ダビデはその確信をもって生きたのです。たとえ、いのちが狙われようと、どんなに窮地に追いやられようと、どのような苦しみの中にあっても、問題の中にあっても、また、喜びの中にあっても、主が私とともにいてくださるのです。私は一人ではない、いつも主がともにいてくださるのです。サタンは皆さんをだまします。「あなたは一人だ、孤独だ、淋しい。」と。しかし、私たち信仰者は言います。「決して私は淋しくない、一人ではない。」と。なぜなら、イエスが私たちのために死なれたのは、私たちに「**主がいつもともにいてくれる**」という約束を与えるためです。私たちはその約束をいただいたので

す。この地上の生活において、私たちは主とともに生きる者として歩むことが出来るのです。天国を待つ必要はないのです。もうすでに、私たちには天国民としての歩みが始まっているのです。確かに、イエスにお会いして天国でイエスとともに過ごしますが、今すでに、天国民として神との歩みが始まっているのです。

だから、皆さんにお願いしたいのです。今日この礼拝が終わってお帰りになった後、どうぞ、天国民らしく歩んでください。なぜなら、あなたはそうなのですから、常にこの約束を覚えてください。「主は私とともにいる!」、電車に乗ろうと、自転車でお帰りになろうと、歩いて帰られようと、車でお帰りになろうと、主はあなたとともにいるのです。そのような祝福を神は私たちに約束してくださったのです。そのために、イエス・キリストは死んだと言うのです。恐らく、みことばの中で、信仰をもって間もない私を最も励ましてくれたのは次のみことばです。マタイ 28 : 20 「…見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」、何という約束でしょう! 全能の神、すべてをお造りになった創造主なる神が私とともにいてくれるとは…。その神を遠くに感じるのは私の問題です。聖書の約束は「わたしはあなたとともにいる。」です。神が私の祈りを聞いてくれないかのように思うのは私の問題です。神はいつも私とともにいてくださっているのです。そして、感謝なことに、私の益のためにすべてを為してくださっているのです。本当に感謝ですね! だれよりも私の弱さを知っている神、私の愚かさを知っている神、その神がともにいてくださり必要を与え続けてくださるのです。そのような祝福の中に私たち信仰者は入れられたのです。

パウロはこのずばらしい恵みを私たちがしっかり理解するために、エペソ人への手紙の中で、救われる前の私たちと救われた後の私たちの霊的状态についてこのように記しています。2 : 12-13 をご覧ください。「:12 そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については外国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。:13 しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。」

1) 救われる前の私たち (12節) : かつての私たちがどれほど望みのない者か、どれほど神の恵みから外れて救われる資格などない者であったかを教えています。ここには、救われる前の私たちがどのような状態であったのかが、五つ記されています。(1) キリストから離れていた : つまり、キリスト、救い主のことについては全く聞いてもいないし知ってもいなかった、知らなかったということです。私たちはみな、生まれながらにイエスのことを知りませんでした。私も聞いたことがなかった。みんなそうだというのです。救い主のことを知らないから、私たちは救いに関して全く希望のない者だったと言うのです。(2) 主によって選ばれたイスラエルの国から除外されていた : イスラエルの人々は神によって選ばれた者です。でも、神はイスラエルだけを救うといわれたのではありません。皆さんよくご存じのように、創世記 12 章でアブラハムに与えられた約束は、イスラエルを通して全世界の人々が祝されることでした。異邦人に祝福が及ぶことが記されています。しかし、パウロは言うのです。まず、神が祝され神が用いられたイスラエルの国民、私たちはそうではなかったと。(3) 約束の契約については外国人 : この「外国人」とは「外国人、遠い国からやって来た人」という意味です。つまり、神の祝福や神の約束からは全く無関係な者だったということです。(4) 何の望みもない者 : イエスを信じる前の私たちは死に対して全く無力でした。ただそれを恐れて待つしかなかったのです。どんなに努力しよう、何をしよう、私たちは「死の力」に打ち勝つことは出来なかった。しかし、この「死」に打ち勝たれたイエス・キリストによって、私たちも死に対する勝利者になったのです。私たちは死んで、それで終わるのではない、滅びるのではない、主とともに永遠を過ごせる、そのような者へと生まれ変わったのです。でも、救われる前は違いました。救いの希望のないときは、私たちは恐れを抱きながら死を待つしかなかったのです。だから、死について考えたくなかったのです。パウロが言うように「何の望みもなかった」のです。死に対しても永遠に対しても全く希望がなかったのです。(5) 神もない者 : 残念ながら、生まれながらにみな真の神を信じていません。神を信じるどころか、神に逆らう者として神の敵として生まれ、そのように生きて来たのです。それが私たちでした。だから、どこから見ても私たちには希望がなかったのです。それが私たちでした。

2) 救われた後の私たち (13節) : (1) 神に近い者とされた : この「遠く…」、「近い」という表現をパウロが敢えて使ったことは、その当時、律法学者たちが書いた書物にその表現をよく使っていたからです。例えば、イスラエルには神殿がありましたが、イスラエルの人々は神殿に近づくことが出来ましたが、異邦人は近づくことが出来なかったのです。ですから、神殿とは神が臨在されているところ、その象徴でした。自分たちはその臨在に近い存在、異邦人は近づけないからそれから遠い存在と、彼らはそのように表現したのです。でも、パウロは言います。「でも、今、イエス・キリストによって、イ

エス・キリストの血によって、救いによって、異邦人も神に近づくことが出来る。そのような者へと変えられた」と。ですから、私たちが今与えられている祝福を正しく理解するためには、神とともに生きることが出来る、神とともに永遠を生きることが出来る、神に近い者とされた、このような祝福に与った私たちですが、だれ一人としてそのような祝福に与る資格がなかったことをしっかり覚えることです。私たちは神に逆らう者、神に背き続ける者、神を汚す者だったのです。しかし、今私たちはそのようなところから離れて、神とともに生きる者へと生まれ変わったのです。パウロはそのことを言うのです。

B. 主とともに生きる者としての歩み 11節

神からいただいたこのようなすばらしい祝福について述べたパウロは、11節に「ですから、」ということばをもって続けます。あなたがたはこのようなすばらしい祝福をいただいた、だから、ですから、あなたがたはこのように生きて行くことが大切だと言うのです。「ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。」と。ここには二つの命令が記されています。パウロはここで救われているあなた、神の恵みによって救いに与ったあなたに、神が何を期待しておられるのか、神はあなたに期待していることがある、それは「励まし合うこと」であり「徳を高め合うこと」だと言います。

1. 励まし合う

「励まし合う」とは、パウロは何を言わんとしたのでしょうか？実は、このみことばを見ると、テサロニケ人への手紙第一4章13節から、パウロはあるテーマについて話をしています。それは「主の日」についてです。「主の日」、それはひと言で言うなら「神のさばき」です。「主日(しゅじつ)」とは日曜日です。でも、「主の日」とは日曜日ではありません。神のさばきを意味します。これは空中携挙、空中再臨に始まって、イエスが地上に帰ってくる地上再臨まで、そのすべてを指してそのように呼びます。イエスがクリスチャンであるあなたを迎えに来てくださる、その空中携挙、空中再臨に始まり、クリスチャンであるあなたとともにこの地上に戻って来る地上再臨までを称して「主の日」と呼ぶのです。その間には7年間の患難時代があります。地上に帰って来られた後、イエスは千年間の王国を築かれることが黙示録の中に記されていることは、皆さんよくご存じです。

さて、その「主の日」についてイエスはずっと話していますが、テサロニケ人への手紙第一の中から幾つかの箇所を見ましょう。

5：2「主の日が夜中の盗人のように来ると言うことは、あなたがた自身がよく承知しているからです。」、それは突然、予期しないときにやって来ると言います。

5：3「人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。」、「主の日」とは「滅び」です。滅びが襲いかかるときです。先ほども言ったように、神のさばきが成されるのです。非常な苦しみの伴うときです。

5：9「神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、…」、とクリスチャンに対してこのように言っているのです。ということは、この「主の日」を通る人々、さばきを受ける人々、彼らはそのときに神の御怒りを経験すると言っているのです。

ですから、大変な時が約束されているのです。そして、そのさばきが来る前に、神はご自分に属する者たちをご自分の元へと引き上げてくださるのです。だから、空中携挙というのです。そして、その後、神に対して逆らってきた者たちに、神の救いを拒み続けた者たちに神のさばきが下ります。神の怒りがこの地上に下されます。そのことをパウロはここで言っているのです。

ですから、パウロが11節で「互いに励まし合いなさい」と言っているのは、4章18節に「こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。」とあることばと非常に関連しているのです。慰める必要があったのは、人々がこの再臨について誤解していたからです。だから、パウロは真理を教えて「この真理によって動揺することがないように慰め合って行きなさい。」と言ったのです。この「再臨」、「主の日」について教えているパウロは、あなたがたは「互いに励まし合って行きなさい」と言います。つまり、パウロが言いたかったことは、主の日が近いから、再臨のときが近いから、私たちはそのためにこれまで以上に熱心に走り続けて、しっかりとこの信仰のレースを走り終えるように励みましようということです。ちょうど、陸上の選手がゴールを間近にして一生懸命よたよたになりながら走っているその時に、周りのみんなが「もう少しだから頑張れ！」と応援している、まさにそのように、しっかりとこの地上の信仰の歩みを終えるように励まし合って行きなさいと言うのです。パウロはそのように命令を下すのです。あなたがたは主とともに生きる者となった、だから、互いに励まし合いながら、しっかりとそれぞれの信仰のレースを走り終えるように励まし合って行きなさいと。

2. 徳を高め合う

ここで使われていることばは建築に用いることばです。「徳を高め合いなさい。」とは、家を建てる、

建築するという意味をもっています。今では、工場で作った家をもって来てあっという間に家が出来てしましますが、この当時はそういうことはありません。雨の日も風の日も、晴れている時も、じっくりと一生懸命忍耐をもって家を造り続けた訳です。パウロがここで言っている「徳を高め合う」とは、互いの信仰を高めるように成長させるように助け合って行きなさいということです。信仰の成長は一日にしてならないのです。ちょうど、忍耐をもって家を建てるように、信仰の成長も時間がかかります。忍耐が要ります。でも、そのようにして、それぞれの信仰が成長するように助け合って行きなさいという命令を与えているのです。

では、具体的にはどうすればいいのでしょうか。「励ますこと」はよく分かります。「徳を高め合って行く」こと、それぞれの信仰の成長のために助け合って行くには、どうすればいいのでしょうか？エペソ人への手紙4：29を見てください。「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」

(1) 自らの言動に注意する：お互いの信仰を成長させて行こうとするなら、自らの言動に注意しなさいと言います。私たちの語ることを注意を払いなさいということです。無責任な行動をしてはいけないのです。(2) 徳を養うことばを話す：このようなことばを見ると「私はもう黙っておきましょう、余計なことをよく言うし、言っていることは正しくても言い方が間違っているし、黙っているのが一番いい…」と思うかもしれませんが、そのようなことを言われているわけではありません。よく見ると、「必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」と記されています。よく考えてください。どうすれば人の信仰は成長するのかということです。良い話を聞いたなら私たちの信仰は成長しますか？しません！私たちの信仰が成長するために必要なものは、神のおことばです。それによって成長するのです。ですから、どれ程立派だと言われている人の話を聞いても、人間の話では成長しません。神のことばによって成長するのです。なぜなら、みことばがそのように私たちに教えているからです。

皆さんよくご存じのように、Ⅱテモテ3：15-17にこのように記されています。「：15 …聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。」、本当の知恵をくれるのは聖書だけです。世の中の知恵が神の前に空しいのは、世の中の知恵をもって神を知ることにはないからです。しかし、みことばを通して私たちは神を知ることが出来ます。みことばを通して神のみこころを知ることが出来ます。ですから、私たちの信仰を成長させるために必要なものは「神のおことば」なのです。「：16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。：17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」、神があなたの成長のために与えてくださったものは聖書だけです。だから、私たちも兄弟姉妹が集まる時には聖書のみことばを分かち合うのです。「いやー、私はまだ信仰歴が浅くて聖書のみことばを分かち合うことなど出来ません。」と言われますか？出来ます！私たちがこうして礼拝や集会で聞いたみことばをともに分かち合うことが出来ます。いろいろなことをして、私たちは神のみことばによって、それぞれの信仰を養って行くのです。だれも「私の話」を聞きたいなどとは思いません。聞きたいのは、神のおことばです。だから皆さん、私たちはこうして毎週集まって神のみことばを聞いています。しかし、海外にいる邦人たちはそれが叶っていません。彼らができることはインターネットを通して聞くことだけです。ですから、彼らがともに集まって日本語で話を聞く時に彼らが望むことは、私たちの個人的な話や人間的な話を聞くことではなく、神のおことばを聞くことです。そのようにみことばに対する渴きを、神は彼らに与えておられるのです。ですから、彼らが何時間でも残ってみことばを聞こうとしているのは、彼らが聞きたいからです。そして、彼らは知っているのです。何が自分の信仰を成長させてくれるのかを…。神のおことばだけです。パウロはそのことを知っています。

それで、私たちにとって必要なことは、私たちはしっかりと神のおことばをもってそれぞれの信仰の成長に励んで行くことです。多くの皆さんは「私はできない」と思っておられるかも知れませんが、それは大きな間違いです。なぜなら、皆さんとの交わりを通して、私自身がどれ程励まされていることでしょうか。海外に行って、毎週、礼拝メッセージを聞けない人たち、そのような方々と時間を過ごしていて、彼らの聖書に対する知識はわずかかも知れませんが、彼らの神に対する愛は私への大きな励ましです。ですから、私たちが集会に行き朝から晩まで集会をして、一番励まされているのは実は私なのです。ここに私たちの愛する同胞がいて、彼らがみことばを愛し神を愛して歩んでいる姿を見て励まされるのです。だから、あなたも人々を励ますことが出来るのです。だから、あなたも人々の信仰の成長に大いに用いられるのです。あなたの焦点をしっかりと神に向けて、神のみことばに立ってあなたが交わりを持つとするなら、神は祝してくださるからです。

パウロが与えたこの二つの命令は、「励まし合いなさい」、「それぞれの信仰のために徳を高め合っ

て行きなさい」ということです。ここで、皆さんに見落としていただきたくないのは、11節にある「互いに」ということばです。新改訳聖書では敢えて2回繰り返されていますが、実際には1回しか出ていません。どちらにもかかっているのです。この「互いに」という代名詞ですが、これはとても大切なことばです。というのは、「互いに」とは「相互に、お互いに」ということです。つまり、ここで与えられている命令、「励まし合う」、「徳を高め合う」ということは、みながしなければいけない働きだということです。私たちの問題は、だれかにしてもらいたいということです。自分を慰めてもらいたい、自分の信仰を成長させるために助けてもらいたいのです。でも、残念ながら、聖書はそのようには教えていません。救われたあなたに神が望んでおられること、神とともに生きる者として生まれ変わったあなたに神が期待していることは、あなたが出て行って励ます者となることです。あなたが出て行って人々の信仰の成長に役立つ者となることです。だから、ここでパウロは「互いに」と言ったのです。相互のことです。受けるだけではないのです。与えるのです。ですから、もし、信仰者のあなたが出て行って、神の約束を信じ、神が用いてくれると確信して出て行って、だれかといっしょに神を見上げて賛美するなら、神の恵みを分かち合うなら、神はちゃんとあなたを使ってくくださるのです。人々の励ましのために、人々の信仰の成長のために、神はあなたを使ってくくださるのです。

この命令はすべての信仰者に与えられたものです。条件はありません。信仰歴5年の人が、10年の人がこれをやりなさい…ではありません。主とともに歩むことを可能にしてくださった神、つまり、救われたあなたに神が期待していることは「人々を励ます者になりなさい」、「人々の信仰の成長に役立つ者になりなさい」です。それが神の命令なのです。それは神があなたに期待しておられることです。期待しておられることを神は実践させてくださいます。あなたが望むなら…。

今この二つの命令を見て来ました。もちろん、あなたがこの救いの恵みに与ったのは、これだけではありません。神があなたに期待しておられることはこれだけではありません。残された短い時間、もう少し、みことばが教えること、救われたあなたに対する神の期待について、神が何を望んでおられるのかを見て行きましょう。

3. 備えをする

救われたあなたはいつも備えを為しなさいと言います。Iテサロニケ5：6－8でパウロはこのように言っています。「ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。：7 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。：8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶととしてかぶって、慎み深くしていきましょう。」、パウロはここで私たちは備えをもって今日生きることが必要だと言っています。救われたあなたはいつも備えをしていなければいけないと言うのです。何に対する備えでしょう？それは「イエスにお会いする備え」です。イエスにお会いする備えをして今日を過ぎしなさいと言うのです。

1) 目をさましている 6a、7a節

ここで「目をさましていなさい」と言っているのは、多くの人々が目をさましていないからです。7節には「眠る者」とあります。同じ人たちを指しています。彼らは神の警告に耳を傾けないのです。これは救われていない人たちのことです。彼らは神の警告に対して一切耳を貸そうとしません。罪のさばきがあると聞いても彼らは関心を持ちません。パウロが言うことは、そのように救われていない人たちの生き方にクリスチャンも惑わされてしまうことがある。だから、目をさましていなさいと言うのです。「イエスが帰って来る」と言われても、まだ帰って来ない、まだ、10年も20年も帰って来ないのではないかと言う人たちに「眠っていてはいけない」、「備えを怠ってはいけない」と言うのです。しっかりと備えをもって、今日がイエスにお会いする日かも知れないという、そのような思いをもって今日を過ごして行きなさいということなのです。

2) 慎み深くしている 6b、7b、8節

「慎み深くしていなさい」とあります。6節、7節、また、8節に書かれています。7節を見ると、それに関して「酔う者は夜酔うからです。」とあります。つまり、パウロはここで、「酔う者」、すなわち、アルコールによって支配されてしまった人のことを言うのです。そのような人は、アルコールが支配しているから正常な判断をすることが出来ません。つまり、自分で何が神の前に正しいのかを判断できない人がたくさんいるということです。ですから、「慎み深い」とは、いつでも正しい判断ができる人で、そういう人でありなさいと言うのです。8節に「信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶととしてかぶって、慎み深くしていきましょう。」とあります。ということは、信仰や愛や希望に関していろいろな戦いが来るからです。ですから、そこをしっかりと守りなさいと言うのです。この「慎み深い」の説明に関して、二つの武器があります。

(1) 胸当て：

「胸当て」は心臓を守ります。信仰と愛をしっかりと守るように、また、救いの望みに関しても、それを失うことがないように、奪われることがないようにしっかりと守りなさいと言います。

(a) **信仰**：イエスを信じるということではなく、神に対する信頼のことです。みことばへの信頼です。間違った教えに対して身を守るにはどうしたらいいか？しっかりとみことばに立つことです。サタンがどのようにして人々を誘惑して来たか、覚えておられるでしょう。

サタンの策略：・みことばへの疑い＝サタンがエバを誘惑したとき、創世記3：1に「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」とあるように、みことばに対して疑いをもたせるのです。・神ご自身への疑い＝そして、みことばだけでなく、神ご自身に対しても疑いを抱かせようとするのです。ですから、彼はこう言います。創世記3：4-5「あなたがたは決して死にません。：5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」、つまり、「この木の実を食べるとあなたは神のようになる、そのことを知っている神はそのようにさせまいとして食べてはいけなかったのです。神はあなたのことなど考えていないのです。あなたの最善なんて考えていない。神は自分のことしか考えていない。あなたに神のようになって欲しくないから食べてはいけなかったのです。」と、このように言って神を疑うように働くのです。この策略は変わっていません。サタンはいつもみことばを疑わせます。そして、いつも神を疑わせます。本当に神さまで私のことを愛しているのだろうか？私のことをいつも心に留めてくださっているのだろうか？と…。そうして私たちはいつも疑いをもつのです。皆さん、これはすべて罪です。そのような信仰者は悲しいことに喜びも希望もありません。だから、そういうことにならないように、あなたの神に対する信頼についても、そして、愛についても、しっかりと自分を守って行きなさいと言うのです。

民数記23：19「神は人間ではなく、偽りを言うことがない。人の子ではなく、悔いることがない。神は言われたことを、なさないだろうか。約束されたことを成し遂げられないだろうか。」、この質問に対する答えは「神は言われたことをなさる」、「神は約束されたことを成し遂げられる」です。このみことばはその信仰を明らかに示しています。皆さん、いろいろな教えが入って来て私たちの信仰を惑わします。でも、私たちがしっかりと目を向けなければいけないのは神のおことばです。私たちはどのような神を信じたのか？私たちが信じている神はどういうお方か？どのような約束をしてくださったのか？その約束に立つことです。神は人間ではありません。偽りを言うことがないのです。アーメンです！その通りです。それで十分なのです。神がおっしゃったことは必ずそうなるのです。「人の子ではなく、悔いることがない。」、神は謝る必要はないのです。神がおっしゃったことに誤りがありませんからです。言われたことをきっちりとして為さる方、約束を守られる方、これが私たちの神なのです。どれ程すばらしい約束でしょう。また、どんなに強い確信を私たちに与えてくれるみことばでしょう。この信頼がぐらつかないように自分を守って行きなさいと言うのです。

(b) **神に対する愛**：それが他の方に向かないように私たちは守っていかなければいけません。神を愛するゆえに、その教えに喜び進んで従うのです。

(2) かぶと：

「かぶと」は頭を守ります。「救いの望みをかぶととしてかぶって」、私たちはこの永遠のさばきから救われ、後には、この罪のからだからも解放されます。そのすばらしい約束をしっかりと覚えて私たちは歩いて行くのです。この信仰と愛と希望をしっかりと守りなさいと。Iテサロニケ1：3では、これが私たちクリスチャンの三つの特徴であると言っています。「絶えず、私たちの父なる神の御前に、あなたがたの信仰の働き、愛の労苦、主イエス・キリストへの望みの忍耐を思い起こしています。」、神を信頼して、神を愛して、そして、神に希望をおいて生きる者たち、そのような歩みを継続するためにしっかりと自らを守って行くようにと言うのです。

「私たちは備えをしなければならない。」とパウロは私たちに言いました。いつイエスにお会いしてもいいように、自らの信仰をしっかりと吟味して、自らの愛を吟味して、自らの希望をしっかりと吟味した上で、主にお会いするその日を待望しながら今日を生きて行きなさいと言うのです。マッカーサー先生は面白いことを言っています。「信仰が弱いと愛が冷える。愛が冷えると希望がなくなる。」と。私たちにとって必要なことは、しっかりと自らの主に対する信頼を、そして愛を、そして希望を覚えることです。

4. 福音を伝える

救いのメッセージを伝えることです。Iペテロ2：9には「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。」と、そのことが

明確に記されています。あなたが救われたのはこの救いのメッセージを伝えるためです。神はそれを期待しておられるのです。

5. 聖く生きる

聖く生きることを神はあなたに期待しておられます。同じⅠペテロ2：24には「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」とあり、救いに与った私たちに神が期待しておられること、それは地上にあって聖く生きて行くことです。神が喜んでくださるように正しく歩んでゆくことです。Ⅰテサロニケ4：7には「神が私たちを召されたのは、汚れを行なわせるためではなく、聖潔を得させるためです。」とあります。「聖くありなさい」と、それがあなたを救った神があなたに望んでおられることです。

6. 主のために生きる

当然のことです。それが救いでしょう、皆さん。かつての私たちは自分のために生きていました。しかし、私たちはそれが間違っていたことに気付いて、私たちが目的をもって造ってくださった方の目的に沿って生きて行こうとします。神でないものを神として崇拝して来た私たち、その罪を悔い改めて、神である方を崇めて、その方を愛して従って行こうとするのは、当たり前のことです。そして、その神の教えを聞けば、私たちの人生は私たちのものではなくて神が私たちに託してくれたものだと分かります。神のために用いなさいと。Ⅱコリント5：15に「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」とある通りです。みことばは明白に私たちに教えてくれています。神が何を望んでおられるのか？ということです。ですから、私たち信仰者はどんなときでも、主に喜ばれることが何であるのかをしっかりと考えて、それを選択することです。あなたが救われ、あなたが今日生かされているのは、あなたが神の栄光を現わすためです。神のすばらしさを世に証するためです。それをするためには、私たちは神が喜んでくださることを選択して行かなければいけないのです。

もうすでに、私たちがローマ書で学んで来たように、聖霊が祈ってくれています。私たちが神の力をいただき知恵をいただきながら、神が喜んでくださることが何なのか判断してそれを選択することです。そのようにして私たちは生きるのです。なぜなら、私たちのこの人生は私たちのものではないからです。神を証するために神が私たちに託してくれたものなのです。

神の恵みによって救われた皆さん。少なくとも、私たちは今、神がどのようなことをあなたに期待されているのかを見て来ました。励ます者になりなさい、人々の足を引っ張ったり、人が喜ばないこと、また、成長の妨げになることを話したりしない、却って、信仰の成長に役立つことをして行く。そして、いつもイエスに会う備えをもって歩んで行く。どんな時にでもこのキリストのすばらしい救いを伝えて行く。そして、自らを罪から離れ聖く保ちながら、主の喜ばれることを選択して主の栄光を現わして行く、主のために生きる、これが救われた私たちが神から望まれていることです。

どうですか？そのように歩んで行きたいと思われませんか？なぜなら、みことばは明確に、私たちに「これがわたしがあなたに望むことだ。」と教えているからです。このようにあなたが生きるためにイエスはご自分のいのちを捨ててくださったのです。私たちがこのように歩んで行くことによって、私たちの主が喜んでくださるのです。私たちはそのように生きるべきです。そのように歩んで行くべきです。問題は、私たち一人ひとりがそのことを心から選択するかどうかです。

皆さん、いつも私たちはこうしてみことばを通して神のみこころを知るのです。それは神が望んでおられることです。私たちはそのことを聞いた時に、神が私たちに問われることは「あなたはどのように生きますか？わたしに従い続けますか？わたしが喜ぶことをあなたは選択して行きますか？わたしのためにあなたは生きていますか？」です。もし、どこかに反省するところがあれば、主の前にそのことをお詫びして、今日から新しく歩み始めて行くことです。神が望んでおられることを、神の助けをいただきながら為すとき、神のみ栄えが現わされて行きます。私たちはそのように歩んで行きたいものです。そして、お一人ひとりがそのような歩みを今日からまた始めてくださること、そのことを心から期待します。